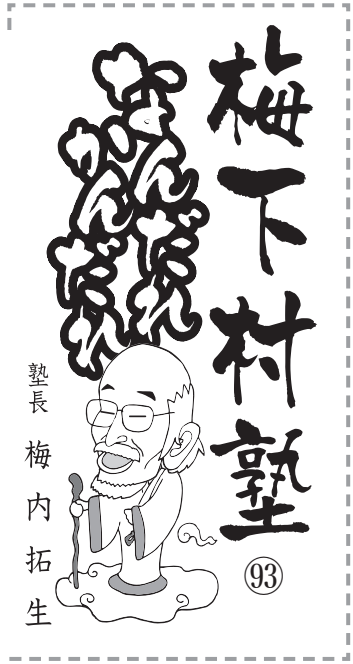
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



（歩みと人生）

3月10日（日）第5面　東海文芸　高田一柳会（2月）

宿題「歩く」

脚二本だけでは足りず
杖をつき

人生を歩きつづけた靴
の減り

（佐々木七草）

返柳

靴減らし杖までついて
我が人生

歩み寄り言葉交わせば
しこり解け

目標を決めれば足も軽
くなり

（佐々木多美子）

返柳

言葉かけしこりが解け
て軽い脚

やっと歩調合って楽し
む古希の旅

踏み出した一歩に風が
柔らかい

（千葉誠子）

返柳

古希の旅風に歩調を合
わせたり

反抗期自分の道を歩き
出す

見て聞いて歩いて拾う
知恵袋

（西村千恵）

返柳

反抗期道を歩めば智恵
拾う

孫のお守朝から歩き走
らされ

北国の春の歩みの遅い
こと

（新沼志保子）

返柳

孫早い歩みゆっくり老
いの春

（謎かけつなぎ）

第1面の「奇跡の一本松　復興お預け」への「謎かけ」

「奇跡の一本松とかけて何と解く」

「老いの反抗と解く」

「その心は？」

「足一本では歩けない」

3・11の大津波で何万本というあの見事な高田松原が流されてしまった。松原を再現するには大変な時間と労力と費用が必要である。奇跡的に、一本だけ残った松の木を保存しようという意見が高まって、その保存への取り組みが始まった。いろいろな問題が湧き上がってきている。

数億円もの費用がかかること、再現された者は自然の松の木ではなく人工のサイボーグであること、昔の松原とどのようにむすびつけるのか、議論は続く。松も群生してこそ、あの美しい松原を形造ることが出来る。老いて孤独な奇跡の松は、他の松の木と一緒に群生していた懐かしい場所で自分の一生を終えたいと思っているのかもしれない。

循環する地球の物理的運動の中で、生命をもつものは、自分の立ち位置を考えなければならないと思う。そのためには旅が必要ということか？

（東海新報記事から）

3月13日（水）の第1面の世迷言には「家庭円満の秘訣は食にあり。…調味料と、そこに書いてあるレシピ通りに用意された材料を買い、そのままフライパンで炒めればOKという手軽さがうけているそれはともかく、包丁もまな板も使わずに済み、後片づけも楽という時代の流れに沿えばやがて「家庭の味は」全国共通になる？」と述べている。

「家庭の味」の素晴らしさを再認識する必要なことを述べている。家庭の味は食事から始まり、共同体としての文化を知ることだと思う。

東海文芸の高田一柳会（2月）の宿題「歩む」は旅の世界につながっている。インドのヒンズー教の教えは人生を学生期、家住期、林住期、遊行期と四つに分けている。

林住期とは旅に出て、経験から学んだことを交換しながら、自由な生き方を行い、それを楽しむ時期であるとしている。旅に出ると、自分の家庭の味の意味が分かって来る。

20年以上も海外での旅の生活を経験した。いろんな土地で、その土地の文化と、料理を楽しむことが出来るようになった。

60年以上も前の敗戦後の食糧難の時代に盛町の七夕祭りの次の日に部落の会議をする「場会場（じょうかいじょう）」で（かさこし）という子供たちの慰労会をしていただくのが慣例であった。部落のお母さんたちが作ってくれた御馳走。その時の味付けご飯のおいしさは今でも忘れられない。

まさに家庭ならず、「部落の味」である。